

STAR ARISE

伊月・マスグレイヴ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新たな星が誕生するまでのお話

S
T
A
R

A
R
I
S
E

目

次

STAR ARISE

憎い、憎い、憎い。

なぜ我らを裏切ったのか。なぜ我らがこんな仕打ちを受けねばならないのか。

この嘆き、この絶望、この怒り、この怨嗟、教えてやらねば気がすまぬ。

奴らを許すな。我らを貶めておきながらのうのうと生きながらえている者たちを地獄に叩きつける。

我らを欺き、なかつたものとした業。

誰も裁かぬというならば、我が裁こう。

貴様らがしてかした過ちを、身に降りかかる怨嗟をもつて知るがいい。

彼の名はエンデ・ニル。

呼び覚ました者に染まり、慈悲を与える神と呼ばれる彼は今、どこからともなく捧げられる邪悪な心により、終焉をもたらす破神として目覚めようとしていた。

破神の前に立ちふさがるのは、4人の勇者たち。

巨大な怪物を倒したのもつかの間、

ずり落ちたハート形の仮面から覗かせた空洞に吸い込まれてしまつた勇者たちがその中で見たものは、

闇のエネルギーで作られた、ドクドクと脈打つ赤い球体と、生贊と

して捧げられたかつての敵たちだつた。

この禍々しくグロテスクな、心臓を思わせる物質こそが、エンデ・ニルの正体である。

終わりなき悲しみと絶望は血の涙となり、

憎悪と執念は黒い呪詛となり、

絶えず赤い球体から撒き散らされている。

絶望と恐怖が、そのまま形を得て飛び出したかのような光景である。

こんなものが自分たちの住む星にたどり着けば、大惨事になること

は想像に難くない。

このおぞましい負の感情の塊を止めなければならないと、勇者たちが決意したその時、ひとりでに呪詛を呴くばかりだつた赤い球体が突然うごめき出した。

破神は、目の前に現れた勇者たちに何を感じたのか。

外殻を倒し、中に入ってきた侵入者に警戒しているのか、敵意を感じ、全てを破壊する者が、逆に破壊されるなどあつてはならないと考えたのか、

ただ死にたくないと思つただけなのか。

もしかしたら本人にもわかつていらないのかもしない。

ただ一つ確かな事は、彼は自分で生まれつた心ではじめて思つたのだ。

目の前のできを、めつせねばと!!

激しい戦いの末、破神は、倒された。

この銀河のすべてを救いたいという人々の思いが生み出した、無限大の力に敗れたのだ。

友もなく、闇の物質として生まれた破神には、あの眩しくもあたたかい光は、猛毒でしかなかつたのである。

しかし、破神は完全に消滅したわけではなかつた。

そして、破神を復活させようとする者もまた、諦めてはいなかつた。

何度叩きのめされても、暗黒面に落ちようとも、

一心不乱に祈りを捧げる者の手によつて、破神は再び蘇ることになる。

しかし：

以前、破神を復活させた際に器とした、

「ジャマハート」と呼ばれる邪悪な心を集めて形にしたものは、破神の

爆発と共に宇宙の塵と化してしまった。

もはや、神の復活に材料を選んでいる余裕などなかつたのだ。狂信者は希望も絶望も見境なく、あらゆる心を捧げた。

かくして破神は、夢も、闇も、魂も、心も、

全てがぐちやぐちやに混ざりあつた、

まさに「魂沌」と呼ぶべき存在として蘇つた。

そしてニルは、他でもない再び自らと相対している勇者たちによつて、その有り様を変化させつつある。

長い長い時間銀河をさまよい続けた彼の中から今、何が生まれようとしている…！

全てが以前を上回る、究極を超えた戦いの末、

ニルは再び勇者によつて倒された。

しかし、誰が勝つたかなど、重要なことではないのだ。

もとより勇者たちはニルを滅ぼすために戦つていたわけではなかつた。

それは、破壊し、蹂躪し、孤独なまま、悲劇と嘆きをいたずらに撒き散らすことしかできない、ニルを救うための戦いだつた。

彼らが見つけた、お伽話か、夢物語かもわからない、

ニルと古の勇者たちの伝説を描いた書には、

「集うエネルギー次第で、ニルは様々な存在になりうるかもしけない。」と記されていた。

勇者たちは、ニルが自分の姿を真似しようとしていたのを思い出し、自分たちの愛ときずなの心を注ぎ込めば、邪悪な心を取り去れるかも知れないと考え、その可能性に賭けたのだ。

狂信者により捧げられた闇の心、勇者たちによつて伝えられた光の

心。

戦いを終え、混沌と可能性の全てが集つたニルは、
淵源の祖となり、新たなる命へと生誕した。

彼は、破神としての役目を終え、
ゆっくりと次の時代へと進みはじめたのだ。

今まで感じたことのなかつた、希望と夢が身体中に満ちていくのを感じながら、ニルは、はじめて勇者たちを見た時に、彼らに對して感じた「何か」の正体をようやく知つた。

それは羨望だつた。それは憧憬だつた。
たくさん仲間に囲まれて羨ましい。

自分も彼らと同じように友だちがほしい。

孤独の中で、自身を浸す絶望と狂気を這いずつていた彼は、眩く光るような心を持つた勇者たちを見て、彼らを羨んだのだ。

そして破神だつたニルは、勇者たちの中から一人、ずんぐりとした体型の、ピンクの若者の姿を真似て、友だちを作ろうとしたのだ。
しかし、闇の物質である彼が友だちを作るために行つたのは、洗脳して、意のままに操ることだつた。

これでは上手くいくはずもない。

実際勇者たちは、操られた仲間の洗脳を解いたり、
ぶちのめしてから叩き起こしたりして、正氣に戻していた。
体の自由を奪い、無理やり従わせることのどこが友だちか。
圧倒的な力を持つていながらも、

結局は生まれたばかりの赤子でしかなかつたニルは、
そんな当たり前のことにすら気付けていなかつたのだ。

でも、今度は大丈夫。

思いやりと、心と、きずなを知つた今なら、
彼もちゃんと友だちを作ることができるだろう。
つぎは、じゅうにとぶことも、ゴハンをたべることも、
おひるねをすることだつてできる。

ニルは輝かしい未来に思いを馳せ、笑顔を浮かべた。

そして、溢れ出る星と光に視界は次第に真っ白になつていき……

そして、何も見えなくなつた。

気が遠くなるほどの間、彼は長い長い夢を見続けていた。
友と食べ物に囲まれた、幸せな夢。

見たこともない地を進んでいく、心踊る夢。
ライバルたちとのぎを削る熱い夢。

時には事件が起きたりもするけれど、
夢に出てくる人はみんな笑顔で、

憎悪や嫉妬と言った負の感情ばかりを吸収していた彼にとつては
新鮮な光景ばかりであつた。

見える。多くの人と出会い、別れ、築かれていく繋がりが、次元を、
銀河を、宇宙を超えて、無限に広がつていく。

繋がりはやがて力になり、数々の奇跡が生まれていく。

ああ、その光景は、なんて素晴らしい……

目が覚めたとき、彼は見知らぬ場所にいた。

ここはどこだろう？自分は何をしていたんだつけ？

周囲を見回しても、見覚えのない景色ばかり。

知らない場所でひとりぼっち。小さい子供なら、

不安で泣き出してしまいそうな状況である。

でも、彼は前向きだつた。その事を悲しんだりしなかつた。

：そういう悩むということを知らないだけなのかも知れないが。
目覚めた彼にはやりたいことがあつた。

それは、ずっと見続けていた、あの夢に出てくる、
はるかぜのふく場所に行つて、夢に出てきた友だちに会いにいくこ
とだ。

彼は純粹で真っ直ぐだつた。夢の中の出来事が現実では起きない
なんて考えててもいなかつたし、あの光景が夢まぼろしの類では無い
と、彼は信じて疑わなかつた。

みんなにもう一度あつて、今度こそ友だちになるんだ。
ドリームランド
夢見た地を目指して、

彼は旅人となり、はるかぜとともにその一步を踏み出した。

異空を駆け、銀河を渡り、星々を巡る旅の途中で、
彼は様々なものを見て、感じて、体験した。

空気を吸い込んでぷかぷかと空を飛ぶ術を身につけたり、
はじめて食べた、Mと書かれたトマトの味に感動のあまりしばらく
動けなくなつたり、

毛虫という生きものを見た時に生まれて初めて嫌悪感というものを
を感じたりした。

やきいもを食べたら、しゃっくりが止まらなくなつたり、
カレーライスを食べた時は、そのあまりの辛さに口から火を吹いて
しまつたこともあつた。

腕力を競う大会に参加した時は、危うく星を真っ二つにしかけたこ
ともあつたし、

星に迫る隕石を、バット一本で跳ね返したこと也有つた。
時には喧嘩になつたり、トラブルを起こしてしまつたこともあつた
けれど、

彼は、自分に唯一残された、「染まる力」を使って、みんなのために頑張つたり、時には悪いやつをぶつとばしたりした。

旅の途中で体験した出会いと別れは思い出となつて、彼の心にキラキラとした星のように輝いていき、それはやがて夜空を埋め尽くして、煌めく星空へと変わつていった。

彼はもう、二ルではなくなつていた。

気が遠くなるくらい長い長い旅の末、もはや自分が何のために旅をしていたのかも忘れてしまつていた頃、彼はとある小さな星の、そのまた小さな国にたどり着きました。普段はあきれかえるほど平和なはずのその国、「ッププランド」では、どうやら今、大事件が起きているようです。

慌てふためく住人に話を聞くと、昨晩、丘の向こうのデデデ山から、くいしんぼうで有名なデデデ大王とその手下がやってきて、国中のすべての食べ物をかつぱらつてしまつたそうなのです！

人一倍くいしんぼうな彼は、食べ物がなくてお腹がすくことがどれほど辛いことなのか、痛いほどよくわかります。

同じくいしんぼうとして、デデデ大王の悪事を見逃すわけにはいきません。

みんなの食べ物をぼくが取り戻し、みんなおなかいっぱいはんを食べられるようにしてあげようと、彼はひとり立ち上がることを決意

しました。

「ありがとう、親切な旅の人！ぼくワドルディ、君の名前はなんていうの？」

いつまでも旅の人呼ぼりでは失礼だろうと思つて出た質問ですが、聞かれた彼はきよとんとしてしまいました。

名付け親がいなかつたのもあります、なんと彼は今まで一度も自分の名前を意識したことがなかつたのです。

でも、彼がなんと名乗ろうか答えに詰まることはありませんでした。

：カービイ。ぼく、カービイ！

不思議と頭の中から出てきた名前を名乗り、
彼はデデデ山を目指して旅に出ました。

はるかぜとともに現れたゆうかんな若者。

その名は「カービイ」。

PPP プランのみんなのおなかを満たすため、
 それいけカービイ、がんばれカービイ!!